

ならず、時として「墓地の公共空間化」を意味する。それはつまり、大規模な造成工事や便宜施設(例えば進入路・駐車場・祭壇・トイレ・休憩施設など)の設置を伴うものとしてイメージされるのである。そのような自然葬地の「造成」を通じて、墓地による土地の占有という国土の価値毀損を阻止し、生者のための空間として土地を効率的に活用することが、韓国の「自然葬」論の主眼となっている。

すなわち、韓国の「自然葬」論は、土地の利用価値という側面における「国土の蚕食」や、墓地難といった政策的課題に対応する代案として、位置づけることができる。そのような「自然葬」論の特徴として指摘できるのは、墓地の価値を「ゼロ査定」し、葬礼や追慕といった文化的な面から論じられるべき「墓地そのものの効用」を論じない、という点である。韓国の「自然葬」論においては、「死者を葬る場」への個々人の思い入れといった側面への関心を読み取ることは難しい。その意味で、韓国の自然葬は、宗教学のような人文科学ではなく、公共政策学や経済学といった社会科学的な議論の対象となっていると言えよう。

そのような研究のトレンドに対して、日本の自然葬に関する金セツピョルのイデオロギー研究的な視点や、また韓国の納骨堂についてインタビューに基づく事例研究から丁ユリが描出して見せた儀礼や追慕の形式、あるいは新たな死と生の空間の生成といった視点をいかに織り込んでいくのか、といった点は、なお今後の課題として残されている。

戦没者慰霊の一考察

白山芳太郎

全国戦没者三〇万人の慰霊を行う政府主催「全国戦没者追悼式」が、毎年八月一日に開催されている。同追悼式は昭和三八年に始まり、同五七年からは「戦没者を追悼し平和を祈念する日」の行事として開催されている。近年では同式典に、政府ならびに遺族ら約六千人が参列している。また遺骨収集などで海外や硫黄島(後述の沖縄は国立沖縄戦没者墓苑)などから帰還の戦没者遺骨を千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納骨(現在、約三六万柱)し、同墓苑納骨の遺骨に拝礼する「千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式」が厚労省主催で毎年五月、皇族臨席のもと、開催されている。海外や硫黄島などからの戦没者遺骨の帰還は昭和二七年から始まり、平成三年から旧ソ連抑留死亡者遺骨帰還、同六年からモンゴル抑留死亡者遺骨帰還が実施され、その結果、約三三万柱の遺骨が帰還。旧陸海軍や邦人引揚者の持ち帰った遺骨を含めると、海外戦没者約二四〇万柱の約半数(約一二七万柱)が帰還。ところで、昭和五九年六月、東京都千駄ヶ谷の修養団本部で開催された文部省補助事業婦人奉仕活動指針会議の席上、那覇市首里公民館から参加の社会教育指導員より「沖縄県民は、戦争が終結するといち早く遺骨収集に取り組んだが、三九年経過しても、沖縄の山野にまだ遺骨が眠っておられますので、ぜひ皆様にも収集奉仕をお願いします」(『修養団沖縄遺骨収集ボランティア第二三回実施報告書』)とする動議が出され可決された。それにより修養団主催遺骨収集実施が計画された。昭和六一年、修養団第一回沖縄遺骨収集が実施され本年

まで計二五回行われている。以下、事例研究として修養団第二回沖縄遺骨収集について考察する。第二回は、ひめゆり部隊の最期の生存者自決の「荒垣海岸」を中心とする収集であった。ネム・ハイビスカス、ガジュマル、ハマユウ、ブーゲンビリアなど、本州では冬を越せない草木が、現地では年間を通じて温暖なため低木に育っている。そのような中、作業を開始した。当初、小さな骨が見つかった。子供の足の骨と思われる。そうしてしばらくした時のことである。頭蓋骨の脳天部を私が収集した。そして高橋氏（茨城県在住）が珊瑚礁の岩に突き刺さっている顔の下半分を収集した。われわれと同時期、別途、遺骨収集を実施していた金光教沖縄支部戦没者遺骨収集団の人々と、国立沖縄戦没者墓苑納骨堂で出会った。金光教沖縄支部は昭和五二年より沖縄遺骨収集を実施している。国立戦没者墓苑には約一八万柱の遺骨が安置され慰霊されている。この納骨堂は、昭和五四年に建てられたもので、赤い琉球瓦で葺かれた参拝施設と沖縄の石で積み上げられた納骨堂から成る。修養団は、財団法人であって、各種の参加者がある。糸満市の長谷寺住職も平成二二年から毎年参加されている。地元の方や修養団所属の人ばかりでなく、沖縄県護国神社、広島県護国神社、大分県護国神社、京都産業大学、皇學館大学なども参加し、糸満の大城藤六氏の指導で遺骨収集を行ってきた。慰霊祭斎主は、沖縄県護国神社祢宜であった。上記初日の遺骨収集を終えた翌朝の収集作業は、二班にわかれて行うこととなった。われわれは、前日と同じ海岸で遺骨収集を行っていたが、第二班は大城氏を中心とする特別班で、そこはかなり危険なところであ

った。潮が満ちてくると戻ることができなくなるといふ喜屋武海岸であった。しばらくして国吉勇という現地の恐らく沖縄での最も多数の遺骨収集をされている人が、軽四輪でわれわれのところへやってきて、その補佐に私が指名された。そのため上記喜屋武海岸に私も向かった。そこで大腿骨と肋骨が岩場で見つかった。丹羽氏という岐阜県在住の人物が、バールで岩を持ち上げ、間から私は砂を除去し、遺骨収集を行った。以上、修養団沖縄遺骨収集を事例研究とする戦没者慰霊に関する一考察である。

シュヴァイツァーにおける生命観の諸問題

岩井謙太郎

本発表においては、まず、遺稿『世界宗教における文化と倫理』でシュヴァイツァーが検討する、世界の諸宗教における世界観の重要な要素が、一元論的思惟（インド的思惟と中国的思惟の理念的類型）と二元論的思惟（キリスト教の理念的類型）によって構成されていることを検討し、その特性を考察する。次いで、彼が、単に諸宗教の理念的類型（一元論的思惟と二元論的思惟）だけでなく、歴史的現象としての諸宗教の錯綜した状況（一元論的思惟における二元論的要素、二元論的思惟における一元論的要素）をも検討していることを考察し、そこから、一元論的思惟と二元論的思惟を相互媒介する共通の視座として「生への畏敬」の世界観（彼独自の生命観）を構想していることを論じる。

一元論的思惟と二元論的思惟（理念的類型）の特性（関係